

製造都市・深圳の今 ～「世界の工場」から「イノベーション発信拠点」へ～

はじめに

空を飛び交う小型無人飛行機“ドローン”、ホバーボードで商業施設内を移動する子供達、ショーケースにずらりと並ぶVR（バーチャル・リアリティ）装置。日本の秋葉原の30倍以上もの規模と言われる深圳・華強北路の電気街を歩くと、日本では見慣れない最先端の電子製品が所狭しと並ぶ光景に目を奪われます。香港から電車で約1時間のところにある中国・深圳のこの電気街は、昼夜ハイテク産業に携わる人々のエネルギーに満ち溢れています。

1970年代には小さな漁村に過ぎなかったこの街が、わずか40年足らずで「ハードウェアのシリコンバレー」として世界から注目される都市となったことは、中国という国がどれだけのスピードで高度成長を遂げたのかということ象徴していると言えるでしょう。

今回のレポートでは、中国全体の景気減速感が強まり、経済構造転換の必要性が叫ばれる中で、「世界の工場」から「イノベーションの発信拠点」へと変貌を遂げる深圳の今をお伝えします。

深圳の発展 ～世界企業を輩出する都市～

深圳の今をお伝えするために、まずはこの街の歴史について触れたいと思います。

前述のとおり、香港に隣接する深圳は、1970年頃は小さな漁村に過ぎませんでした。しかし、1980年代に入り、中国初の経済特区の一つとして、対外開放の窓口となったことが状況を一転させました。新しい優遇税制の仕組み、安い人件費等が、香港、台湾、日本等の製造業者に生産拠点の移管を促したことから、当地への産業の集積が始まったのです。

この改革開放路線のもと、高度経済成長期に突入した深圳は、1980年～2015年の35年間における実質GDP成長率が年平均23.0%という、北京（同10.1%）や上海（同9.9%）を凌駕する驚異的なスピードで発展し、地場企業はOEM生産などの下請け製造を通して、世界のハイテク技術を貪欲に吸収していきました。この街から世界3位のスマートフォンメーカーである「華為技術（ファーウェイ）」や中国最大のSNS「微信（ウィーチャット）」を運営するIT企業の「騰訊（テンセント）」などが生まれたのもこうした土壌があったからでしょう。

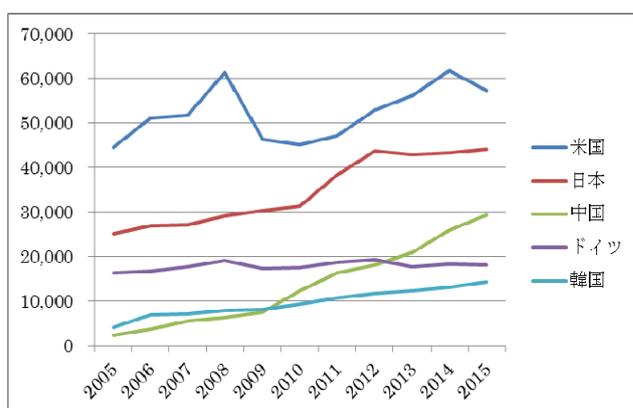
なお、ここ最近で最も注目されている深圳の新興企業の一つとして、小型無人飛行機“ドローン”のメーカーである「大疆創新科技（DJI）」が挙げられます。当社は2006年に設立された業暦の浅い会社ですが、現在、商用ドローンにおいて世界シェア70%を占めており、わずか10

年足らずで社員数は 4,000 人以上に拡大しています。この企業の注目すべき点は、設立当初から急速なスピードで欧米などの世界市場を開拓し、新産業分野を牽引するグローバル企業となっている点です。

これら深圳の企業の活躍は、同市の PCT（特許協力条約）の国際出願件数（受理ベース）にも如実に表れており、2015 年には中国全土の約 47%を占める 13,308 件（中国国家知的財産権局 統計）に達しました。

もちろん、これほどの都市や産業の発達には、不動産価格の急騰や人件費上昇を引き起こしており、従来の「安価な製造コスト」というメリットは薄れつつあります。この状況から、労働集約型の多くの製造業者が深圳から中国内陸部やベトナム、フィリピンなどに生産拠点を移管する動きがあることも事実です。

【PCT の国際出願件数(受理ベース) 上位 5 ヶ国の推移 / 単位: 件】



(世界知的所有権機関・WIPO 統計データに基づき作成)

深圳の魅力 ～何が人々を惹きつけるのか～

それでもなお、深圳には新たなビジネスの可能性を求めて世界中から人々が集まってきています。いったい今、この都市の何が魅力となっているのでしょうか。

第一に挙げられるのが、圧倒的なサプライチェーンの存在です。長年にわたる製造産業の蓄積の結果、現在、深圳では通信機器など多くの分野において、車で僅か 1 時間の圏内で、部品調達、組立・生産、検品等のプロセスが完結できるという好環境が整っています。そのため、日本では製品化に 1 ヶ月を要するものが、深圳ではわずか 1 週間という短期間で完成すると言われており、このエコシステムこそが同市の最大の魅力となっています。実際に、深圳の電気街・華強北路の巨大な商業施設に入ると、そこで売られている物のほとんどが電子部品であり、あらゆる素材が揃う環境にあります。さらに言えば、「山寨（しゃんざい）」と呼ばれる深圳特有の模倣（コピー）文化が、ある意味で技術革新を加速させているという一面も否定できません。

このほかにも深圳の魅力の一つとして、この都市ならではの「多様性・開放性」が挙げられます。もともとは人口わずか3万人の漁村であった深圳は、現在、約1,100万人の常住人口を有していますが、うち90%以上が他の地域からの移住者で構成されています。深圳で暮らすほとんど全ての人々が「よそ者」であるという土地柄はある種の自由さを醸成しており、国内外から起業を志す人々が集まる風土があります。また、北京という政治の中心から最も離れている場所に位置していることも、極めてしがらみの少ない街を形成する要因となっているのです。

おわりに ～10年後の「Made in China」～

深圳の魅力的な一面をお伝えして参りましたが、商慣習や文化・価値観の違いによって、海外からこの地に進出してビジネスを行うことは容易ではありません。製造委託の依頼一つをするにしても、いかにローカルの事情に精通し、信用できる相手先を見つけることができるかが成功の鍵になります。

しかしながら、改めてここで強調したいのは、このような中国の状況も世代の移り変わりとともに、大きく変化していく可能性があるということです。インターネットや海外留学・旅行が浸透するにつれて、若い世代が自国に対する客観的な視点を養いつつあります。特に深圳では、米シリコンバレーなどを筆頭に、新技術に敏感な世界各地の人々との草の根レベルでの人的交流が進んでおり、今後一層、世界的な視点と高い意欲を持った新興企業が台頭することが想定されます。

「Made in China」、従来、ローエンド製品の代名詞のように用いられていたこの言葉も、10年後の世界では全く違う意味を持つ言葉となっているかもしれません。日々のニュースでは中国景気の減速感等が取り上げられていますが、新たな潮流を生み出そうとするこの国の胎動を、深圳では確かに感じとることができます。

【華強北路の商業施設外観】



【VR装置が数多く展示される華強北の商業施設】



【華強北・賽格廣場 / あらゆる電子部品が手に入る】



【9月末にオープンしたDJI 香港店は、夜も賑わう】



(写真: 香港駐在員事務所 所員撮影)

